「山の神信仰」研究序説

栗　原　真帆子

地理学において私が探求しようとするものは，地域性，風土といったことである。もう少しかみくだいていうならば，土地の個性とでも言ったらよかろうか。

その場合，ただ単に地域の外面を追うだけではなく，内面を探究してみたい。内面を探究することはすなわちその地域に居住する住民の感情なり意識を探究することである。つまり研究の視点を人間の側へ置き，そしてその地域を眺めてみようというのである。

この論文ではそのために民間信仰をとりあげた。民間信仰の主体は地域社会であり，そこに生活根拠をおく民衆であるから，先に述べた私の研究目的を果せることができると考えた。

種々ある民間信仰の中で広く日本全国に見られる「山の神信仰」をとりあげた。過去の「山の神信仰」の研究を調べることにより，いくらかでも「山の神」の本質をさぐり出し，さらにそれが実際の地域でどのような形で表われているか，照らし合わせ確かめることによって，地域を内面から探究できると考えた。

まず過去の研究を集め，私の考えで次の三つのテーマに沿いまとめ直した。

1. 山なるものになぜ畏敬の念を持ったか。
   (山のどういうところにひかれ，信仰心を持つに至ったか。)
2. 祖霊信仰に結びついた山の神信仰
3. 祖霊信仰に重点をおかない山の神信仰

1のテーマにおいては民俗学，宗教学，文学などさまざまな分野の人々からの研究がある。それぞれの立場でそれぞれの観方で検討しているので，どれが真理だということはできないと思う。

2のテーマ，山の神を祖霊神と結びつけて論じた文献は大変多い。それらの研究の頂点に立っているのは言うまでもなく柳田国男によるものである。また柳田国男自身の数ある研究の中でも祖霊研究はその中心的地位にあるといってよい。山の神と祖霊神との関連において柳田が言わんとするところは，他界後の祖霊が山中に残留することから，山の神霊を祖霊との融合態にみるところである。

しかしこの山の神の神格を祖霊神とみる観方は，古代日本人を農耕民とした場合であるという反論が最近出てきている。つまり農耕民と限定するならば，そのように言うこともできるが果してそうか。

農耕民以前に猟民がいたのではないか。狩猟民が祀った山の神と農耕民の祀った山の神ではその性格は異なるとする観方がある。その一人千葉徳爾はこれら二つの山の神をはっきり分け，その豊富な狩猟研究による裏づけをもって狩猟民の山の神を論じている。もう一人，狩猟民の山の神と農耕民の山の神についてくわしく論じている者にネリー・ナウマンがいる。彼女は千葉氏のようにはっきり区別しているわけではなく，むしろ一線をひいて区分するのは不可能だとし，狩猟民の祀る山の神を古い層とし，その上に農耕民の祀る新しい山の神層を構築している。そしてナウマンはさらに次のように言っている。

「日本全土に妥当するような総一的な<山の神>像は存在しない。そのような普遍的統一的概観は地方によって各種各様の表象を人工的に合成した一つのフィクションに過ぎない。」

たしかに民間信仰としての山の神を考えているのだから，その形態，教義，儀礼などがしっかり定まっているはずはないので，当然普遍的山の神がとらえられるはずはない。

それでは具体的に実際の地域では山の神信仰はどういった形をとっているのか，茨城県西茨城郡岩瀬町大田西山地区における「山の神祭」を例にとり考察してみる。

岩瀬町は東京から北東へ約85㎞，水戸から西へ約30㎞のところにある。

町の北部・東部・東南部を丘陵性の山地で囲まれた盆地である。

岩瀬町の歴史は古く，人間の生活の営みが始められたのは縄文時代であろうと言われている。数々の遺跡・貝塚・矢鏃・石棺などの史料からすでに証明されている。さらに奈良朝時代の仏像も残っており、古代から平安にかけて，岩瀬町は文化的にそうとう高い水準にあったと考えられる。

平安末から鎌倉・室町にかけては岩瀬町一帯は戦場化し，やっと太閤検地の頃平安をとりもどし西那珂郡と称した。

江戸時代に入いり岩瀬町の大部分は笠間藩に属し，農村としての形態を整えていった。

現在岩瀬町は石材業などの産業があることにはあるが，やはり主産業はなんと言っても農業である。東に水戸，日立の商工圏，南に土浦，筑波学園都市，西に下館の商業，北に真岡の工業圏等の各拠点的都市が周囲にめぐり，それらの中心部に位する岩瀬町はおのずと供給源的な役割をもっている。以上が岩瀬町の概観である。

岩瀬町大字犬田西山地区にみられる「山の神祭」

場　所　茨城県西茨城郡岩瀬町大字犬田西山地区

日　時　旧暦11月15日（現在12月15日）

夕方～晩（決っているわけではなく，各自暇な時に別々に行なう）

施祭者　部落でまとまって行なうのではなく，山持ちの人が行なう

祭の内容

まず山神祠を新藁で作りかえる。これをワラホウデンという。場所は家々によって異なるが自分の持っている山（歩いて5，6分の裏山）の麓の大きな木の下（大体は松），中には自分の庭に祀る者もある。

山持ちでない人は付近の山持ちの人のところへ集まってくる。

神前に赤飯，魚（ホウザシ―イワシの丸干のことが多い）を供える。煮しめを供える家もある。

去年の崩れかかっているワラホウデンを焼く。火をつけて焼く意味は山入の仕事で怪我をせぬようにとか、悪魔はらいなどだそうだ。まだこの火で焼いた魚を食べると風邪をひかぬとか病気にならないという。

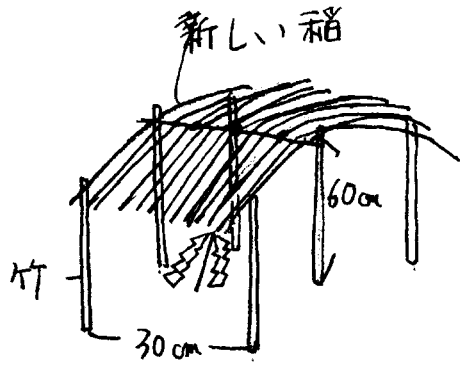
火の燃えさかっている時に昔は子供達が大声を張り上げて「山の神トトシ，　猿のケーツマ　カンダー，牛蒡焼イテブッツケロー」とくりかえして歌ったという。しかし娯楽の発達した現在，この歌

は全く歌われていない。だが，中年以上の人々は意味は説明できずとも覚えている。

この祭の意義を考えてみると，山持ちの人々にとって山は一つの財産であるのだから（山は生活のいろいろな恩恵を与えてくれたから）山神への報恩，祈願の祭であったといえる。

次にこの犬田西山地区の山神祭を第一章の過去の研究例との関連で考えてみる。

この山神祭が火祭行事であることから，火は祖霊来訪の重要な要素であるため，犬田西山地区で祀られている山の神の神格に祖霊神を想定することができるのではないかと考える。しかも西山地区は真言宗でとなりの境地区は浄土真宗であるという。第一章第二節の堀氏の論文にあるように「かつて浄土真宗地域は火葬が多く真言宗地域は土葬が多い。しかも土葬の場合，その墓をヤマと呼び葬儀にまつわる言葉にはヤマが多く用いられている。さらに両墓制をとる場合には現身を埋葬するヤマは死者の国であり，他界であり，そして祖霊のいる場所である。」ということから，真言宗の西山地区には山の神信仰が発達し，浄土真宗の境地区には発達しなかったのではなかろうか。



ワラホウデン
（藁奉殿）